

表現を着がえる演習

東京都墨田区北部の「向島地域」と呼ばれる京島・八広・文花エリアは、「東京一災害のリスクが高い」「災害に弱い町」とされてきたからこそ、まちづくりに尽力してきた地域の連帯や、近い距離で「共に生きていく」高度な暮らしが根付いている。

企画タイトルである「表現を着がえる演習」は、藝大生向けに実施している自主練の名称でもある。最終的なアウトプットとして、展示というフォーマットの中で、モノとしての作品が求められるがちな本学美術学部のカリキュラムにおいて、自らの表現を別の条件で、別の形態で思考していくためのレッスンである。学生たち個々の主題を、お題（他のメディアや方法、状況、場所）に合わせて変換するとしたらどんなプランになるかという構想を、毎回発表しあっている。

本企画は、この応用編として、向島地域の洋品店を舞台に、学生と町の人々が「表現を着がえる」試みである。

「着がえる」ことは、他者の立場になって考えることであり、その差異から気づきを得たり、着がえられない核を発見することである。その意味で、「着がえる」ことは「共に生きる」ことであると言える。「共に生きる」技術について、学生と町の人々が学び合う（共創する）ために、「すみだ向島 EXPO 2024」の会期中、学生たちのいろいろな企画を洋品店で展開する（空き店舗ではないので、洋品店の機能は残したまま、学生たちのアイデアが掛け合わされていく）。

店主にとって、これまで仕入れ、陳列、接客というルーティンでは常連が減っていくストーリーしかなかったところに、学生の表現がお店に介入するこ



向島地域の洋品店にて商売をされている店主（左）とお姉さん（中央）と。こういった経営中の店舗が今回の舞台となる。

とで、店主が第一の観客となり、それを来客者に説明し対話や繋がりを生み出す表現者にもなる。学生たちが場所に合わせて表現を着がえることで、洋品店に訪れる人たちの客層も、そのお店の存在意義も着がえていくことになるだろう。店主は変わらずそこにいて、他者や町と新しい視点で交流する。学生と店主が普段の表現を「着がえる」ことで、「いま・ここ」という着がえられない核を克明に描き出し、ある時代を駆け抜けた商店街における洋品店の「生きたアーカイブ」を、関与者全員が主体的立場となって表現していくのが本企画の趣旨である。

学生たちのいろいろな企画の例

パフォーマンス表現を探究する学生が、店主の日常動作から身体表現を構想したり、対話型ワークショップを研究する学生が、来場者と店主が対話するための企画を構想したり、ファッション表現に興味のある学生が、洋品店の商品からインスピレーションを受けた服の作品を制作して展示したり、調査に基づく映像表現に取り組む学生が、地域の商店街や洋品店のリサーチから映像作品を制作して上映したり、



西尾美也《スクリーン・プレー》山口市中心商店街、2023年

「店舗のアーカイブ」と「着がえる」という2つの着眼点から、衣料品店において着がえる行為の中心地である「試着室」を展示会場にすること、さらに、店舗同士が「着がえる」こと、あるいは試着室に入ると場所が着がえる＝ワープすることをイメージし、店舗Aの試着室に店舗Cのアーカイブ展示を、店舗Bの試着室に店舗Aのアーカイブ展示を、店舗Cの試着室に店舗Bのアーカイブ展示を行った。



西尾美也+L PACK.《浦安するファッション》浦安市内の理美容院、2023年

千葉県浦安市のまちに根付いた5つの美容院、理髪店に協力を得て、市民から預かった古着や空間を居心地よくするアイテムを、思い出のエピソードとともに展示した。観客は髪を整える以外の目的で理美容院を巡るという非日常のなかで、浦安の日常に触れていく機会となった。